



## グローバル人材の育成を目指して

藤田 聡

学生の短期留学プログラムの支援をおこなっている。このプログラムでは、比較的近い研究分野の研究室に本学学生を2週間ほど派遣している。さらに、派遣先の研究室からも学生を日本へ派遣してもらい、こちらの研究室で2週間ほど受け入れている。いわゆる交換留学の形をとるこのプログラムは、JASSOが実施する留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）による支援がもとで始められた。かねてより交流のあった台湾、中国、および、マレーシアの東アジア諸国の大学6つの研究室との間で3年前からスタートし、年間30名程度の相互交流を重ねてきた。本年度からは、大学としてJSPSの「グローバル人材育成推進事業」に採択されたため、交流先にオーストラリア、ベトナムを加えて、プログラムを広く展開している。

短期留学の内容は、派遣先やその時々に応じていろいろと変わる。派遣先の研究室で種々の実験を実際におこなったり、研究ミーティングに参加したりという研究活動が中心であるが、派遣先の研究室のメンバーと一緒に学会やワークショップに参加・発表したり、関連企業や他大学研究室などを訪れたり、さまざまな活動をアレンジしている。

本プログラムに参加する日本人学生は、基本的には、4年生または大学院生である。自身の研究に役に立つような広い知識と視野を身につけて欲しいとの考えのもと、参加を募っている。参加する学生にとっては、2週間とはいえ、海外生活に対する期待と不安は大きい。このプログラムで初めて海外に行くという学生も多い。彼らが、安心して充実した海外短期留学をおこなえるよう、受け入れ先の教員とも密に連絡をとりあい、滞在計画を練っている。

ところで最近の若者は内向き志向が強いと言われる。「グローバル人材育成推進事業」の文言を見ても、中国や韓国での海外留学者数の増加と、一方で日本人の海外留学や海外赴任を希望する者の減少、そしてその結果懸念される日本の国際的な競争力の低下を憂いている。したがって、今回のようなプログラムを企画しても、参加を希望する学生がいるかどうか、実施側として当初不安ではあった。ところが学生は、内容の詳しい紹介や、以前に参加した先輩学生の話を知ると、興味を持ち、積極的に参加してきた。

3年間このプログラムを実施してみて感じていることは、多くの学生は「海外に行きたくない」のではない。むしろ「海外に興味がない」もしくは「海外を知らない」のである。日本にいて何不自由なく暮らせるのであれば、あえて言葉の通じない海外に出る必要性はない、した

がって、海外で暮らすなんて考えたこともない、そんな印象である。これは、日本という国が非常に恵まれた環境にあることの裏返しでもある。日本にいれば、食事や安全などの整った環境もあり、母国語で高等教育を含むあらゆる情報を手に入れられるのだから、無理もない話である。

こうした学生が、アジア諸国を訪れると文字通りカルチャーショックを受ける。たとえば、学生の英語が上手なことに驚く。しかし、高等教育や最先端の情報を得るためには母国語だけでは不足だという事実を知り、再度驚く。生活環境も新鮮な驚きに満ちている。経済成長の著しい国々では、街中に溢れる人々のエネルギーを実感できる。と同時に解決しきれていない環境問題や格差社会も実感する。

したがって、本プログラムを経験した学生が得られる成果としては、日本での「当たり前」が、海外に出れば、当たり前ではない、というそれこそ当たりの事実を体験して知るということに他ならない。

グローバル人材育成推進事業においては、「グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる『人財』の育成」という目標が掲げられている。なるほど、これは目指さねばなるまい。ところが残念ながら、今の学生は、グローバルな舞台などと言われてもピンとこない。理由は簡単で、「まわりの国々が擦り寄ってくれる」ことをわかっているからである。これまで日本は、グローバル化を目指して欧米諸国を目標に努力してきた。しかしいつの間にか成熟し、今やアジアをはじめとする新興国が、グローバル化の旗のもと日本を目指している。学生たちは、生まれた時からこの現実の中に育ち、理解しているからこそ、「オレたちがグローバル化？何を今更？」と思うのである。

そんな彼らにとって、アジア諸国に短期留学する体験は、いわば模範生としての立ちふるまいを自分たちが身につけなければならない、との気づきにつながる。海外では自分たち日本人が注目され、評価されていることを知る。この認識が彼らを大きく成長させ、ここで初めて「グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍」するための心の準備が整う。

「井の中の蛙大海を知らず」とは言うが、何不自由なく暮らせるなら井の中で十分である。しかし、井の中の居心地を、広く大海に知らしめるのが良き蛙の役目でもあろう。さて、ともかくも学生たちの意識を変えることには成功しつつある。一方で、今の大人たちは果たしてこの大海の変化についていっているだろうか。

